

M-GTA 研究会 Newsletter no.11

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（自治医科大学看護学部水戸研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ne.jp

世話人：岡田加奈子、小倉啓子、小嶋章吾、斉藤清二、佐川佳南枝、林葉子、水戸美津子、福島哲夫、坂本智代枝、木下康仁

第 33 回 研究会の報告

【日時】 2005 年 11 月 12 日(土) 13:00～17:00

【場所】 立教大学（池袋）10 号館 1 階 x105 教室

【参加者 53 名】

M-GTA 研究会会員 37 名（敬称略 五十音順）

荒井きよみ（千葉大学大学院）・石垣真理子・大島寛子・大橋達子（富山大学）・岡田加奈子（千葉大学）・小倉啓子（ヤマザキ動物看護短期大学）・亀山直子（自治医科大学）・木下康仁（立教大学）・功刀たみえ（桜美林大学大学院）・小嶋章吾（国際医療福祉大学）・酒井都仁子（長南町立西小学校）・坂本智代枝（大正大学）・佐川佳南枝（西川病院）・鹿野裕美（仙台市立松陵中学校）・田尻明美（目白大学大学院）・塚原節子（富山大学）・藤内美保（大分県立看護科学大学）・徳永あかね（神田外語大学）・都丸けい子（筑波大学大学院）・新鞍真理子（富山大学）・西能代（千葉大学大学院）・納富史恵（久留米大学）・林裕栄（埼玉県立大学）・林葉子（お茶の水女子大学）・原島博（ルーテル学院大学）・樋口香織（名古屋大学）・藤丸千尋（久留米大学）・古屋昌美（山梨県立看護大学大学院）・堀内みね子（神田外語大学）・升井恵美（専修大学大学院）・松繁卓哉（立教大学大学院）・松尾淳子（聖徳大学大学院）・松戸宏予（筑波大学大学院）・水戸美津子（自治医科大学）・山川裕子（佐賀大学）・横山登志子（北海道医療大学）・渡辺千枝子（松本短期大学）

西日本 M-GTA 研究会会員 2 名（敬称略 五十音順）

長崎和則（川崎医療福祉大学）・山崎浩司（京都大学大学院）

見学者 14 名（敬称略）

三輪のり子（富山大学）・高木初子（自治医科大学）・中山佳子（早稲田大学大学院）・若杉里美（岐阜大学）・鷗沢京子（千葉県立一宮商業高校）・小松良子（筑波大学大学院）・佐原淑子（島根大学）・標美奈子（慶應義塾大学）・阿部紗香（茨城大学大学院）・武蔵由佳（都留文科大学）・奥野由美子（日本赤十字九州国際看護大学）・長谷川雅美（金沢大学大学院）・是山康代（NPO 法人オリーブの園）・貝谷嘉洋（NPO 日本バリアフリー協会）

【次回の研究会のお知らせ】

日時： 第 34 回 2006 年 1 月 28 日（土） 午後（13:30-18:00 を予定）

場所： 大正大学（立教大学ではありませんので、ご注意）教室は後日お知らせします

【2005 年度公開研究会のお知らせ】

日時：2005 年 12 月 3 日（土）午後

場所：久留米大学（福岡県）...ML で配布済みのプログラムをご参照ください。

【研究報告 1】

小・中学校通常学級に通う二分脊椎症児の学校生活における，
母親の介助行動と障害認識の変容プロセス

千葉大学大学院教育学研究科
養護教育専攻 修士課程 西 能代

発表要旨

1．M - G T Aに適した研究であるか

学校という社会的相互作用の働く場において，母親の行っている介助行動と障害認識プロセスを母親の経験から明らかにする研究であることから，M G T Aに適した研究であると考えられる。

2．研究テーマ

小・中学校通常学級に通う二分脊椎症児の学校生活における，母親の介助行動と障害認識の変容プロセス

3．現象特性

学校においては、母親は子どもの障害を背負うような影の存在から、少しずつ子どもを背中から下ろし、支えながら歩き、自分で歩ませ見守る存在になっていく。

4．分析テーマへの絞込み

小・中学校通常学級に通う二分脊椎症児の学校生活における，母親の介助行動と障害認識の変容プロセス

5．データ収集法と範囲

関東在住の小・中学校通常学級に就学経験のある二分脊椎症の子ども之母親 16 人。

6．分析焦点者の設定

小・中学校通常学級に通う，もしくは通っていた二分脊椎症の子ども之母親

7. 分析ワークシート

2 例の概念について分析ワークシートを提示した。

8. ストーリーライン

結果図を提示しながら、ストーリーラインの説明を行った。

9. 方法論的限定の確認

データの範囲・特徴は、当事者団体に入っている母親で、通常学級での学校生活の介助経験のある人である。さらに、小学校入学時点で子どもの知的障害が見られない人に限定される。データの限界は、母親の性格や生育歴や家族環境、子どもの性の発育発達について語られていない。

以降、省略

. 助言

1) 分析テーマの絞込みについて

介助行動と障害認識：二つの視点が入るのは無理がある。この二つの相互規定的な関係の変化を見ようとしているのではないか。どういう問題を分析テーマに、どういう動きを明らかにしようとしているのか、一つに絞る。自分の問題意識を明確にする必要がある。

母親の障害認識は、介助行動の影響をうけるのではなく、子どもの社会関係の拡大、子どもの成長による行動の拡大、新しい人間関係の形成などに左右されて変わっているように受け取れた。

最初から分析テーマに障害認識が設定されていたとは思えず、もっと緩やかなものではなかったか。分析の流れを明らかにしてほしい。

現象特性で、普通の障害児に付き添っている母親とこの障害の場合では、どこが同じでどこが違うのか、母親自身の動き、子どもと母親の動きの関係という動きの変化、子どもの成長の変化、障害児の母親の受け止め方など、そういう母親の動きのような事象に含めて、この場合にはどういう関係があるのかを分析テーマを決める時に考える。

養護教諭として、小・中学校通常学級に通う子どもの学校生活におけるという部分が一番重要である。その辺を、認識の変容プロセスに、活かして組み込んで、もう一回まとめていくとオリジナルが出る。

2) カテゴリーについて

コアに当たるものは何なのか。それが一番結論のポイントになる部分である。

分析をしている中で、非常に強力に働いている認識をコアとして設定する。

誰かと共に支える障害というカテゴリーは、障害認識の変化に影響を与えていくもので、認識変容プロセスとは別のところに入るものである。変化だけを追わず、その障害認識

が変化していくのに、どういことが影響を与えているかという関係性を明らかにしていくことが重要だ。

3) 概念生成について

お母さんが障害をどう認識したかを概念化するものであり、お母さんの認識が分かる概念になっていない。

4) 研究の意義について

小児慢性病の子どもが、思春期にどう荷物を背負いなおすか、それをお母さんがどのように見守りながら子どもを自立させていくかというプロセスがある。それは難易度が高いケアをやっていく子どもに対応する医療者（介護者）にとって非常に役立つものである。

5) 分析ワークシートについて

反対ヴァリエーションがあるなら、それを独立した概念とすると、この二つの概念は関係していく。

概念の個別的な関係で、つながりを確かめていくという作業がある。個別な概念化と、概念と概念の関係の所を丁寧にするべきである。

感想

皆様に検討していただく機会を頂きまして、ありがとうございました。分析テーマを絞るということが本当に難しく、わかっていなかったと気づきました。データをどのような角度から見なのか、自分の問題意識を再度確認して、分析しなおしたいと考えています。データの解釈作業が本当に重要であり難しいと感じています。全国から集まりました皆様に、真剣に研究についてご助言していただけたという、本当に恵まれた充実した研究会でした。多くのご指摘をいただき、感謝しております。ありがとうございました。

【研究報告 2】

研究テーマ：「健診で上部消化管内視鏡検査を受ける患者が不安・苦痛をコントロールするプロセスに関する研究」

大橋達子 富山大学大学院医学系研究科修士課程看護学専攻成人看護学

現象特性：内視鏡検査受を受ける患者は、侵襲的な検査を受けることへの不安と苦痛を大なり小なり抱いている。検査を受けることへのメリットとデメリットを比較しながら、葛藤を経験し、自分なりにコントロールすることで、検査に臨み、検査を経験していると考えられる。

分析テーマへの絞込み：健診で上部消化管内視鏡検査を受ける患者が、侵襲的な検査を受けることへの不安・苦痛を経験しながら、自分なりにコントロールするプロセス。

分析焦点者の設定：健診で上部消化管内視鏡検査を受ける患者

データの収集法と範囲：対象：健診で上部内視鏡検査を受けた患者 25 名。

カテゴリー生成：26 個の概念から 9 個のカテゴリー、1 個のコアカテゴリーを生成した。

方法論的限定の確認：本研究では、症状や疾患に伴う受診行動ではなく、健診で検査を受ける患者に限定している。また、検査を受けることができた、対象者に限定することで、不安や苦痛をコントロールできた経験に基づく範囲内に限定して分析を行った。

論文執筆前の自己確認

- ・ 何を明らかにしたのか：健診で上部消化管内視鏡検査を受ける患者が、検査を受ける不安・苦痛をコントロールするプロセスを明らかにした。
- ・ 研究の意義は何か：内視鏡検査を受ける患者に対する援助として、オリエンテーションの工夫や、検査に伴う不安や苦痛を軽減する介入を行った効果を検討する内容の先行研究は存在するが、患者自身が、不安・苦痛をコントロールしているプロセスについて明らかにした研究はない。このプロセスを明らかにすることで、効果的な介入の視点を得ることができる。
- ・ 結果、何がわかったか：健診で不安や苦痛をコントロールして検査を受ける行動の根底には、健康志向行動が存在することがわかった。また、それぞれのプロセスにおいて、患者自身が葛藤を経験しながら、その過程を進んでいくことがわかった。
- ・ どういうプロセスを明らかにすることができたか： 検査を受けることを決めるプロセス 検査を乗り切るプロセス 検査を終えた安堵感を得るプロセス
- ・ どのような援助の視点が得られたのか： 不安や苦痛の存在を認め、その内容を知り、軽減を図る援助を行う。患者自身が自己決定できるよう、安心材料を得られるよう、情報提供を行う。患者自身のペースで受けられるよう環境を整え、患者自身で行えるコントロール方法を支持し、それらを支援できるようタッチや言葉によって、検査を乗り切れるよう導く。安堵感を共有し、健康志向行動を支持・強化する。

1、 質疑

- ・ 結果図、結果図の矢印の意味、インタビューガイド、カメラそのものに対する不安・苦痛であれば量的な調査でも良いのではないかと、検査を受ける時どんな不安があるのか、カメラを飲む理由、健診で何回も受ける理由、オリジナルな部分を提示できるか、

などたくさんの意見、ご質問を頂きました。また、とれたデータからもう一度分析テーマを検討しなおすこと、最初の動機をよく考えて、質でとった意味をきちんと考えて意味づけること、などのアドバイスを頂きました。

「木下先生のコメント」: データの良さに蓋をしている。具体例をどのレベルで捉えたら良いのかを検討した方がよいだろう。通常は、報告のように概念のレベルでそれを説明できるというので良いけれど、この研究では研究対象の現象がすでに絞り込まれているので、通常の分析よりも、もう一段レベルを下げて、より詳細な具体例で概念化を行う。データの持つ良さを生かしきれていない、何故このテーマとするのか。このデータの使い方として、レベルもう少し丁寧に細かく見る、不安・苦痛の中身を丁寧に見て、そこから見えてくるものを丁寧に分析すること。

2、感想

分析していくときに、うまくできている部分に集中して、マイナスに傾いている部分や、データの中で気になる部分には目を向けないようにしてきた傾向があります。今回頂いたアドバイスをもう一度データに戻って、考えてみます。まだ、テーマは見えてこないのですが、検討してみたいと思います。この時期に発表させていただき、時間をかけてご意見を頂けたこと、とても感謝しています。これからもよろしく御願いします。

~~~~~

### 【構想発表1】

#### 青年期における生活者としての自立意識の形成のプロセス

千葉大学大学院教育学研究科家政教育専攻 荒井きよみ

### 1 発表要旨

#### (1) M - G T Aに適した研究であるかどうか

昨今の教育改革において、自立に関わる資質や能力の育成が論じられている。若者の自立に関する大規模な量的手法による調査は行われているが、より若者の生活現実に近い自立を捉えるためには、内面で起こっている本質的な部分に迫る必要がある。そのためには従来の視点から仮説検証で分析するのではなく、社会的相互作用による変化を探索的に明らかにしていくM - G T Aが適していると思われる。得られた結果は教育現場に戻し、家庭科カリキュラムを検討する資料としたい。

#### (2) 現象特性および研究目的

家庭科は、戦後民主的な家庭建設という理念のもとに、誕生した教科である。いずれの時代においても生活に根ざし、今と未来の生活に必要な資質や能力は何であるかが問われ、カリキュラムが検討され続けてきた。1975年の国際婦人年を契機に、1980年代以

降様々な領域から「自立」という概念が生まれた。家庭科教育でも自立を「精神的自立、経済的自立、生活的自立」の三側面から捉え、「生活者としての自立」が教科の目標として強調されるようになった。

しかし自立の概念についてはもはや実用的な技術の習得や実践的な態度の養成、科学的知識の形成といった個人的行為レベルで捉えるのではなく、連帯・共生の視点を踏まえて社会的関係で捉えるパラダイムシフトがされている。

そこで生活者としての自立を、「自身の生活現実の構成要素を解釈し、そこから自己を再構成し、さらに他者と共同して問題解決を目指そうとし、かつ方法を獲得している状態」と暫定的に定義して、本研究を行うこととした。

発表者はこれまで高等学校での授業実践において、生活という営みはヒト・コト・モノが絡み合うことを生徒に気づかせ、様々な価値観を見出すことで自立への第一歩となるよう、取り組んできた。一方、複雑で、変化しやすい現代生活の中で、高校生をはじめとする若者は果たして自分の生活を実感できているのか、またどのように実感しているのかを明確に発表者自身がとらえているのだろうか。若者がどのような視角で自身の現実世界をみつめているかを不問にしたまま、従来大人の視点から生活を捉えた授業は、若者の現実の生活と遊離してはいないか。

本研究では卒業生に面接調査を行うことで、彼らが生活をどのような視角からとらえ、自立意識を育てているのか明らかにしたい。面接調査対象者は家庭一般を高校2年間（1.2年次）にわたり履修し、高校卒業後2年経つ。今年成人式を迎えた彼らは、専門的な学力を身につけ、アルバイトやインターンシップを体験し、就職活動を始めなど様々な経験を積み重ねている。

本分析では、若者の生の声そのものをデータとし、彼らが生活を実感するプロセスを捉えなおすことで、生活者としての自立を促す要素を明らかにし、これからの家庭科教育への示唆を得たいと考える。

### （3） 分析テーマ

若者が時間で生活現実の構成要素を解釈していく思考プロセス

### （4） データ収集法と範囲

2000～2001 年度に東京都立高校で発表者が行った家庭科の授業を履修した、現在20歳の男女20名（大学生18名・専門学校生2名）

2005年1月～8月に半構造化面接調査を実施。

### （5） 分析焦点者の設定

自身の生活現実の構成要素を時間で解釈し、そこから自己を再構成し、さらに他者への働きかけから問題解決を目指そうとしている20歳の学生

## 2 質疑応答及び検討事項

### (1) 分析テーマについて

- ・ 分析してわかったことを分析テーマに入れている。
- ・ わかりやすい表現で、ゆるくしたほうがよい。
- ・ 生活と自立の大きなテーマが二つある。生活に焦点をあて、最終的には自立を目指した授業をするための資料を得たい。
- ・ 生活現実を認識していくプロセスなのか、自立していくプロセスなのか。何を現象としてとらえたいのか。生活そのものは普通に意識しなくても流れていくもので、終点のないものであるが、若者が今の生活をどのように捉えていくプロセスを明らかにしたい。
- ・ 今の若者は稼いだお金を全部自分のために使ってしまう、これが未婚にもつながるといった研究がある。自分がどうやって扶養されてきたかとか扶養する側になるときの教育が足りないのでは。そのあたりをテーマにしてみてもいい。

### (2) データ収集法と範囲について

- ・ どうして卒業生なのか、なぜ高校生を対象者にしないのか。授業が彼らのなかで消化され、どのように生活構成要素を解釈していくのにつながり、延いては自立に至るのかをみたかった。自分の授業実践がどのように彼らに影響を与えることができたのかを知りたかった。
- ・ 高校3年生を対象にデータを取って、こちらのデータは別の研究テーマにしたほうが良いのでは。
- ・ どのような質問項目だったのか。印象に残った授業及び役に立っている授業は何か。あまりはっきりしないので、今の生活や今後のことについて自由に語ってもらった。

### (3) 分析焦点者について

- ・ 研究者に対して豊富な材料を与えてくれる対象者とする。それは一人ではいけないのか。その一人以外から類似例がでないものは概念として有効ではない。すべての対象者がはいるように分析テーマを設定すべき。
- ・ 授業の対象者は高校生なのに分析焦点者が卒業生はおかしい。

## 3 感想

貴重な機会をいただきまして、ありがとうございました。ご指摘を受け、的確に回答できなかった点につきましては、この原稿を書いている今こうお答えしたほうがよかったのではと、再考しております。また限られた時間の中でのやりとりでしたので、私の理解の仕方がずれたままである可能性も高く、メール等で更にご意見を頂戴できればありがたいと思います。何はともあれ、こうして皆様からご意見を伺えただけでなく、諸先輩方の優れた論文に触れることができ、収穫の多い研究会に入会させていただいたことに改めて感謝



しております。

どうぞ今後ともご指導よろしくお願いいたします。

## 【構想発表 2】

精神科ソーシャルワーカーが現場での実践経験を通して生成する援助観に関する研究

北海道医療大学看護福祉学部臨床福祉学科 横山 登志子

### 1. 発表要旨

#### 研究テーマ

精神保健福祉領域のソーシャルワーカー（以下、PSW）が現場での実践経験を通してどのような援助観を持つのか、その経験プロセスを当事者であるソーシャルワーカーの視点から明らかにする。なかでも、PSW が精神医療における実践経験の中で自らをどのような存在だと認識するに至るのかを示す自己規定に着目する。

#### 問題意識

精神保健福祉領域の現場は、「社会統制的機能」と「利用者の自己実現促進機能」が同時に存在する場であり、そこに働く者は価値の二重基準のなかで日々の実践を行うことになる。そして、そこでの実践は、PSW の職業的価値の中核である「社会正義」からすると相当深刻な価値ジレンマを経験するともいえる。また、PSW の経験とは、日々の実践のなかでの様々なジレンマを通して省察を繰り返すことであり、その中で「ソーシャルワークとは」「ソーシャルワーカーとは」などについての専門家としてのリアリティーが形成されることでもある。調査ではこのリアリティーに近づきたい。

#### 現象特性

PSW が現場での実践経験を通してどのような援助観を持つのか、その経験プロセスに着目するということは、「経験のなかで専門家としての自己を主体的に規定し直すプロセス」である。

#### M-GTA に適した研究であるかどうか

- 1) PSW の援助観生成のプロセスは利用者や職場の人間関係との相互作用のなかでつくられていく
- 2) どのような実践経験によって、どのように援助観を生成させるのかというのは基本的にプロセス性を主軸にしている
- 3) PSW はヒューマンサービス領域であり、かつ排他的な技術スキルを持っていないという意味でまさに、純粹にコミュニケーションを媒介とした援助行為者であるといえる

分析テーマへの絞り込み（まだ確定していない。候補として2つ提示）

A：PSW が経験を通して専門家としての自己規定を変化させる認識プロセス

B:「専門家としての自己」が「利用者とのつながりを意識する自己」へ変化するプロセス

#### データの収集法と範囲

対象者は設定した4つの条件を満たす精神科ソーシャルワーカーで、インタビュー協力者は15名程度を予定。インタビュー（半構造化面接）を60～120分実施。了解を得て録音し、逐語記録作成。インタビュー・ガイドはPSWになりたての頃にもっていたソーシャルワークや、ソーシャルワーカーのイメージ、そのイメージやかかわり方が変化してきたとすればその変化に影響を与えた経験や出来事、そして現在、PSWとしてソーシャルワークやソーシャルワーカーについてどのように考えているか。

#### 分析焦点者の設定

精神医療において一定の継続した実践経験をもつPSW

概念生成例：最初の概念のワークシート

最初に概念生成したワークシートを配布（終了後回収）

## 2. 主な質疑応答

タイトルにある研究テーマは博士論文のテーマであり、M-GTAを用いた調査の研究テーマではないのでは？ 区別せずにいたので変更。

現象特性の記述に、他の分野のSWとPSWがどのように違うのか、なぜPSWに注目するかの記述を入れたほうがよい。

現象特性では「主体的に規定し直す」、分析テーマでは「自己規定を変化させる」となっており、どちらなのか？ 関心の中心は「自己を主体的に規定し直す」

分析テーマのBは結果の一部を含んでおり、Aの方が良いのではないか。

ワークシートのバリエーション・定義・概念名がぴったりこない。「生活者としての自己認識」とも読める。概念名を変えては 再考

## 3. 感想

構想発表をさせて頂きありがとうございました。ご指摘を頂いた諸点は、いずれも自分ではなかなか気づけない事ばかりでした。これから分析を進めていく上で、ぜひ生かしていきたいと思います。

現在、概念生成の最中ですが、概念を作っては見直しの繰り返しばかりで、これが収束していくのかという漠然とした不安もある一方で、鉾脈みたいなものにある瞬間、触れることができる感覚も味わっています。いずれは、研究報告ができるようにしたいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

.....

**【編集後記】**

- ・ 第 33 回の研究会の報告です。発表された皆さん、ご協力ありがとうございました。
- ・ 詳細は事務局から連絡しますが、来年、2006 年 8 月 26、27 日の週末に合宿型の研究会を開催することになりました。場所は栃木的那須が候補に挙がっています。定例の研究会に参加できない会員の方もいらっしゃいますし、研究会では報告、発表の件数が限られてしまいますので、より多くの会員にプレゼンテーションしてもらう企画です。参加規模にもよりますが、テーマ別にいくつかのセッションに分けて、集中学習を予定しています。まだしばらく先になりますが、参加希望の方はご予約ください。また、ご自身の報告あるいは発表の準備も早めに始めてください。なお、これは公開研究会ではなく会員だけを対象に実施するものです。

(木下記)